

大学・短期大学部卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。また、大学院修了生の皆さん、ご修了おめでとうございます。ご家族の皆さま、ご関係の皆様にも心よりお慶びを申し上げたいと存じます。あわせて、お忙しい中をご臨席賜りましたご来賓の皆様にも厚くお礼申し上げます。

卒業生の皆さんがこれまでの生活を振り返るとき、きっとコロナ禍のことがまず念頭に浮かぶのではないかと思います。本日大学を卒業される多くの皆さんにとって 1 学年先輩にあたる 2020 年度入学生は、コロナ禍のために入学式を行なうことができませんでした。皆さんの学年においては、非常に制限された形でしたが、何とか入学式を行なうことができました。しかし、授業は依然としてオンライン授業が多く、部活動や地域連携活動などをはじめとする課外活動においても多くの制限がかかり、学生の皆さんの安全を第一に考えての措置だったとはいえ、不満や物足りなさを感じることもあったかと思います。短期大学部ご卒業の皆さんは、状況がある程度よくなりつつある時期に入学されたので、在学中の状況はさほどではなかったかもしれませんが、入学以前と併せて考えれば、やはりコロナ禍とその影響は強く記憶に残っていることと思います。学部の皆さんも短期大学部の皆さんも、とりわけ、やや収まってきたかと思うとまた感染者数が増えていくという状況で、感染の波が幾度も繰り返され、コロナ禍の収束は本当に来るのだろうかという不安や焦燥感をほとんどすべての方が抱いていたことと思います。

しかし、その新型コロナウイルス感染症も、波を繰り返しながら徐々に収束していき、2023 年 5 月には 5 類感染症に移行分類され、大学や短期大学部の授業もほぼコロナ以前に近い形で行われるようになりました。つまり、皆さんの在学期間は、いつ果てるとも知れなかったコロナが収束に向かっていく過程と同時進行であったと言えると思います。もちろんコロナは今なお完全に収束したわけではなく、予防や対応に十分な注意が必要であることは言うまでもありませんが、皆さんは、長い夜もやがては明けるように、大きな困難があり、辛い時期であっても、いつかは終わる時が来るということを、在学期間をかけて体験したことになると思います。

もちろんその夜明けは、手をこまねいているだけでやって来るものではありません。この間、医療従事者をはじめとする多くの関係者の献身的な努力と、一般の人々の協力や忍耐があって初めてこの状態が得られたことは十分に認識しなければなりません。そのうえで、本日卒業する皆さんは、あきらめずに希望をもって努力を続ければ、困難は必ず克服されるということを身をもって知ったと思います。どうかそのことを忘れないでいただきたい。そして、そうした中で学業を全うし、課外活動にもできるだけ努力をして、今日の卒業を迎えたことを誇りとしていただきたいと思います。

もう一つ、本日本学を巣立って行かれる皆さんに、少しだけお話ししたいことがあります。

唐突ですが、皆さん、満天の星空を眺めたことがあることと思います。相当に視力が高い人が、高い山の上のような条件のよい場所でみれば、肉眼で見える最も遠い天体は、M33、さんかく座銀河で距離は約 300 万光年、または M31、アンドロメダ銀河で約 250 万光年とされているようです。これらの天体から発した光が数百万年かかって地球に到達するということはすなわち、私たちが肉眼で見れば、それらの天体の、現在から数百万年前の姿を見ていることになります。一方、「明けの明星」「宵の明星」と呼ばれる金星と地球の距離は最も接近した時で約 4000 万キロメートル、その時に私たちが肉眼で見る金星は 2 分 13 秒程度前の姿ということになります。さらに近い地球の衛星である月は 2 秒足らず前の姿を見せているので、私たちはほぼ現在の月の姿を見ていることになります。私たちは目に見えるものはすなわち現在の姿であると思いがちですが、同じ一つの夜空に見えているものははるかな過去の姿からほぼ現在の姿に至るまでが混在しており、さまざまな時間を隔てたものが同時に見えているわけです。

これは時間というきわめて厳格に客観的なものが、その結果いわば主観を裏切る例ですが、身近な話に戻すと、きわめて客観的なはずの時間を私たちはしばしば主観的にとらえています。たとえば、同じ長さの時間が、楽しい時には短く感じられるのに対して、退屈な、あるいはつらい時には非常に長く感じられることは誰でも経験していますし、小さい子どもの時には非常に長かった 1 年が、年を取るごとにどんどん短く感じられるようになることは、すでに卒業生の皆さんも感じていらっしゃると思います。

社会に出ると、これまで以上にこうした「時間」とのつきあい方、時間管理の仕方が必要にもなり、要求もされると思います。とりわけ、時間を効率的に使うことは、仕事をするうえで基本的な課題となってくると思われます。

それに関連して、最近「タイムパフォーマンス」、略して「タムパ」または「タイパ」という言葉もよく耳にするようになりました。とくにいわゆる Z 世代においてタイパを重視する傾向が強いとのレポートもよく目にします。仕事だけでなく、あらゆる事柄にタイパの追及を行おうとする人たちがいるのは事実で、たとえば「家事をしながら動画を見る」というように、二つのことを同時進行で行う、あるいは「倍速で動画を見る」「歌を早送りで聴き、サビだけを通常の速度で聴く」というように、一つのことを時間短縮して行う、といった実例があるようです。

しかしここまでくると、「ちょっと待てよ」と思わざるを得ません。確かに似たことはずいぶん以前からありました。例えば本学の図書館にも収蔵されている『世界文学あらすじ大事典』という、20 年以上前に出版された全 4 巻のかなり厚い事典があり、それを見ると、世界各国のさまざまな文学作品について、原作がどれほど長大なものでも、わずか数ページにストーリーが要約されています。これなどはタイパ追及が何も今日の Z 世代の専売特許ではなく、以前から求められていたことを示す一つの例です。

しかし、実はこの『あらすじ大事典』は、厳密な意味ではタイパは最低かもしれません。確かにごく短時間でストーリーを知ることはできます。しかし、文学作品の価値はストーリー

一だけにあるのではなく、それをどのように構成し表現していくかという所にあることを考えれば、結局作品そのものを読む以外に作品を知る方法はありません。同じように、歌のサビは本来どのような流れの中でどのような位置で現れるのかということでそのサビの表現しようとするところが初めてわかるのであって、それだけを取り出して聞いても、よい気分にはなれるかもしれませんが、本来の意図や価値はわからないままであり、かえってわかったような気にさせてしまう分、弊害が大きいということになりかねません。

タイパは正しく追求すれば非常に意味があることだと思いますが、あらゆる面で追求しようとするれば、本来豊かなはずの体験を、貧弱な、あるいは無価値なものにしてしまう恐れすらあると思います。チャット GPT をはじめ、タイパを可能にするツールはどんどん世に出てきます。一見便利ではあっても、時間の短縮や効率化を自己目的化してしまわないよう、ツールに支配されるのではなく、ツールを主体的に使いこなすようにしていただきたいと思います。皆さんが、自分自身の人生の揺ぎない主役となって、人生を実り豊かなものとなされるよう、心から願ってやみません

大学院社会起業研究科の修了生の皆さんにも一言申し上げます。日本の社会は急速に国際化し、多様化しつつあります。そうした中で、社会の課題も多様化し、国や全国的大企業などが一律の方法で問題を解決することは非常に困難になっており、地域社会の中のいわば小さな単位がそれぞれの環境や条件に適した方法で課題の解決を図っていかねばならなくなっていると思います。皆さんは2年間、それぞれの関心に応じて、その解決につながる発想や方法を研究してこられました。皆さん一人一人が、社会を対象とする専門家であると同時に、地域社会の一員でもあることを忘れずに、大学院で学んだ知識や方法を十分に活かして、地域社会に新たな展望を示し、活力をもたらしてくださることを、大いに期待しております。

以上をもちまして、卒業生におくる言葉といたします。本日はご卒業・ご修了まことに御めでとうございます。